

## Ⅱ. 労働統計の加工指標

### 1. 労働投入量指数・労働生産性指数・賃金コスト指数

#### 1. 1 労働投入量指数

##### ①指標の解説

一般に、生産活動を行う際には、労働力や原材料、資本設備などが投入される。このとき、どの程度の労働力が投入されたのかをみる指標が労働投入量である。具体的には、人数ベース（何人が働いたのか）やマンアワーベース（何人が何時間働いたのか）などの計測方法がある。人数ベースでは1日に7時間働く一般労働者でも3時間しか働かないパートタイマーでも同じように1人と数えられるのに対し、マンアワーベースでは労働時間数の差が示されることになる。

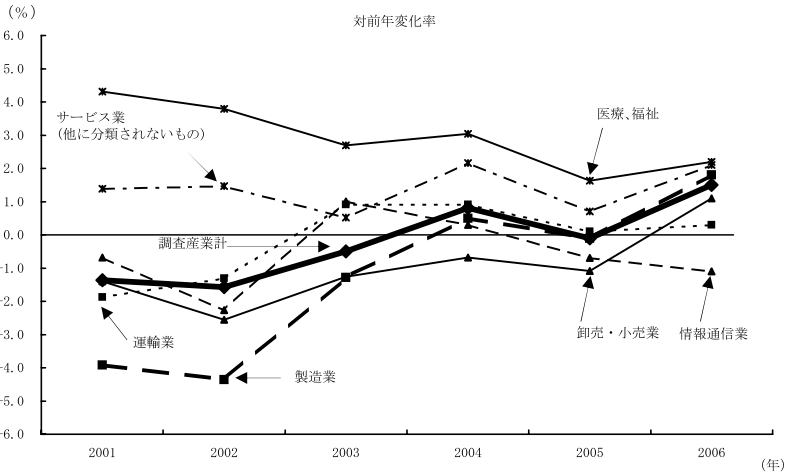
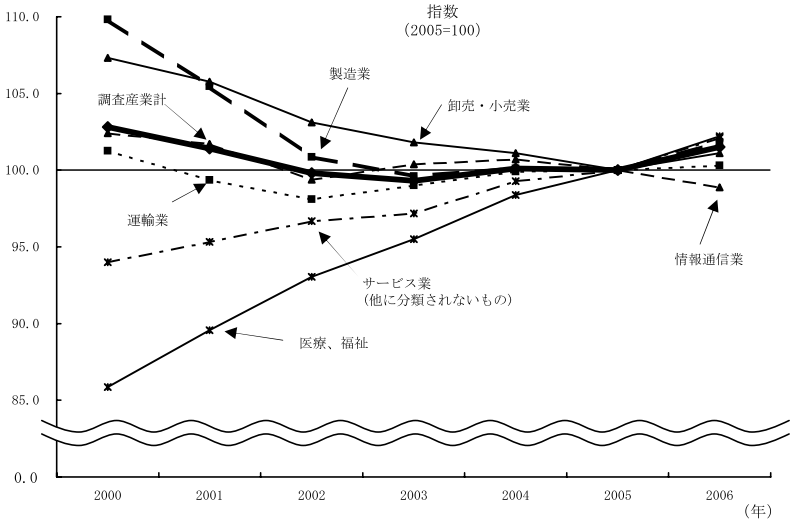
景気後退期に生産物の需要が減少し、企業が雇用量を調整する場合、アメリカではレイオフといった人数面での調整が頻繁に行われるのに対し、ドイツではワークシェアリングといった労働時間の短縮によって労働投入量を調整するケースが多いといわれる。こうした違いをみるためには、労働投入量を人数ベースではなくマンアワーベースで検討する必要がある。

ここではマンアワーベースの労働投入量を、2005年=100とする指数の形で産業別に算出した。なお、本指数は「毎月勤労統計調査」の常用雇用データに基づき算出しているため、臨時・日雇を含まないことに注意が必要である。

##### ②指標の作成結果

産業別の労働投入量を、2005年=100とする指数の形で算出すると、結果は図1-1のとおりになる。図の上段は指数、下段は対前年変化率である。

図1-1 労働投入量指数



資料：「毎月勤労統計調査」

注1：事業所規模5人以上

注2：日本標準産業分類の改訂（2002年3月）に伴い、2005年以降産業分類の内容が変更されたが、ここでは改訂後の日本標準産業分類による数値を過去に遡及して算定している。

### ③作成結果の説明

労働投入量の動きを産業別にみると、製造業では労働投入量が2003年まで減少を続けてきたが、2006年は対前年変化率1.8%の増加となっている。一方サービス業では対前年変化率はすべてプラスであり、労働投入量が増加を続けている。金融・保険業では、2000年以降減少が続いていたが、2006年はプラスに転じた。直近の動きをみると、調査産業計では労働投入量の伸びは2001年から3年間マイナスで推移したが、2004年にプラスに転じ、2005年にはマイナスとなった後、2006年には対前年度変化率1.5%の増加と再びプラスに転じている。

### ④指標の作成方法

労働投入量指数の作成は、常用雇用指数と総実労働時間指数を乗じたものを2005年=100に換算することで算出した。常用雇用指数と総実労働時間指数は厚生労働省「毎月勤労統計調査」（事業所規模5人以上）を利用した。

### ⑤指標のデータ

指標の計算結果（指数及び対前年変化率）は次のとおりである。

表1-1 労働投入量指数

(指数)

(2005年 = 100)

	調査産業計	建設業	製造業	電気・ガス・熱供給・水道業	情報通信業	運輸業	卸売・小売業	金融・保険業	不動産業	飲食店・宿泊業	医療・福祉	教育・学習支援業	サービス業(他に分類されないもの)
1990	103.7	97.2	134.8	116.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1991	104.0	100.0	133.0	116.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1992	104.4	104.7	129.5	115.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1993	103.7	108.6	126.0	115.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1994	104.1	115.1	124.0	117.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1995	105.1	120.6	122.9	119.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1996	106.0	126.3	121.7	114.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1997	105.3	124.3	119.5	112.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1998	104.2	117.4	114.8	112.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1999	102.5	112.8	111.0	111.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2000	102.8	108.4	109.8	112.0	102.4	101.3	107.3	113.6	94.6	100.8	85.9	94.7	94.0
2001	101.4	102.6	105.5	107.2	101.7	99.4	105.8	108.5	95.1	103.2	89.6	95.8	95.3
2002	99.8	100.9	100.9	105.6	99.4	98.1	103.1	104.9	96.0	102.0	93.0	94.6	96.7
2003	99.3	100.0	99.6	101.1	100.4	99.0	101.8	101.5	97.6	98.7	95.5	96.5	97.2
2004	100.1	100.7	100.1	101.2	100.7	99.9	101.1	101.0	99.3	99.6	98.4	99.6	99.3
2005	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
2006	101.5	101.7	101.8	100.8	98.9	100.3	101.1	102.0	101.1	99.4	102.2	103.4	102.1

(対前年変化率)

(単位：%)

	調査産業計	建設業	製造業	電気・ガス・熱供給・水道業	情報通信業	運輸業	卸売・小売業	金融・保険業	不動産業	飲食店・宿泊業	医療・福祉	教育・学習支援業	サービス業(他に分類されないもの)
1991	0.3	2.9	-1.3	0.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1992	0.4	4.7	-2.6	-1.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1993	-0.7	3.7	-2.7	0.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1994	0.4	6.0	-1.6	1.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1995	1.0	4.8	-0.9	1.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1996	0.9	4.7	-1.0	-4.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1997	-0.7	-1.6	-1.8	-2.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1998	-1.0	-5.6	-3.9	0.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1999	-1.6	-3.9	-3.3	-0.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2000	0.3	-3.9	-1.1	0.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2001	-1.4	-5.4	-3.9	-4.3	-0.7	-1.9	-1.4	-4.5	0.5	2.4	4.3	1.2	1.4
2002	-1.6	-1.7	-4.4	-1.5	-2.3	-1.3	-2.6	-3.3	0.9	-1.2	3.8	-1.3	1.5
2003	-0.5	-0.9	-1.3	-4.3	1.0	0.9	-1.3	-3.2	1.7	-3.2	2.7	2.0	0.5
2004	0.8	0.7	0.5	0.1	0.3	0.9	-0.7	-0.5	1.7	0.9	3.0	3.2	2.2
2005	-0.1	-0.7	-0.1	-1.2	-0.7	0.1	-1.1	-1.0	0.7	0.4	1.6	0.4	0.7
2006	1.5	1.7	1.8	0.8	-1.1	0.3	1.1	2.0	1.1	-0.6	2.2	3.4	2.1

資料：「毎月勤労統計調査」

注1：事業所規模5人以上

注2：日本標準産業分類の改訂（2002年3月）に伴い、2005年以降産業分類の内容が変更されたが、ここでは改訂後の日本標準産業分類による数値を過去に遡及して算定している。

## 1. 2 労働生産性指数

### ①指標の解説

前項では生産に必要とされる労働投入量を取り上げた。ただ、労働投入量が多い産業がそれだけ生産も多いとは必ずしも限らない。なぜなら、産業によって労働生産性が異なるからである。労働生産性とは、単位労働力当たりの生産量のことである。単位労働力当たりとは、就業者1人当たり、あるいは時間当たりなどのことである。一般に、技術進歩などによって労働生産性が高まると、労働投入量の伸び以上に生産を増やすことができるようになるため、所得の向上がもたらされることになる。

ここでは、前項の労働投入量指数を用いて、2005年 = 100とする労働生産性指数を作成した。

### ②指標の作成結果

労働生産性指数を2005年 = 100として算出すると、図1-2のようになる。図の上段が指数、下段が対前年変化率である。

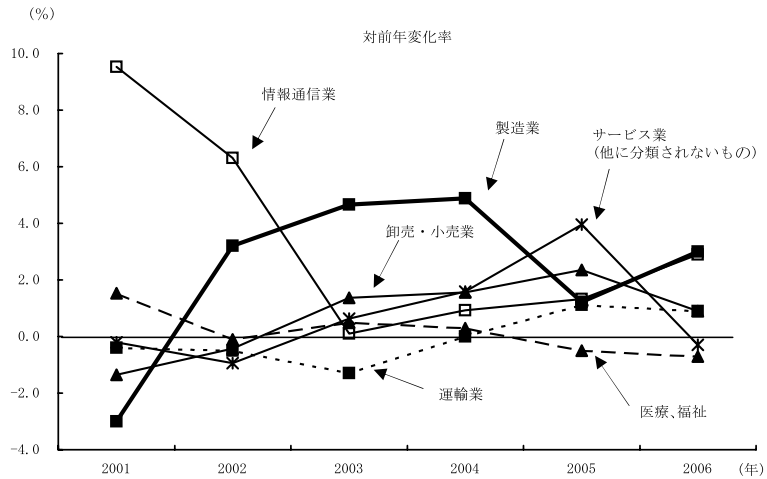
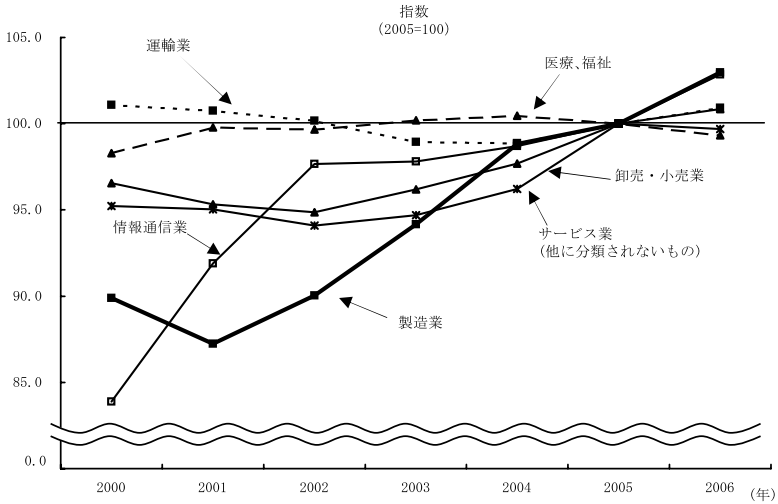
### ③作成結果の説明

労働生産性の動きを産業別にみると、製造業、情報通信業などで労働生産性が上昇傾向にあるのがわかる。製造業では、設備投資や技術進歩による労働力の省力化が他の産業に比べて容易であるため、労働生産性の上昇が大きい。一方、サービス業の労働生産性はほぼ横ばいで推移している。サービス業は労働集約的な産業であり、設備投資の効果が労働生産性に反映されにくいと考えると。同様に卸売・小売業の労働生産性もあまり伸びていない。

### ④指標の作成方法

労働生産性指数は、産業別の生産指数を前項で算出した労働投入量指数で除したものを2005年 = 100に換算して算出した。生産指数は、製造業は「鉱工業生産指数」（製造工業）、その他は「第3次産業活動指数」を用いた。

図1-2 労働生産性指数



資料：「毎月勤労統計調査」、「全産業活動指数」、「建設業活動指数」、「鉱工業生産指数」、「第3次産業活動指数」

注1：事業所規模5人以上

注2：日本標準産業分類の改訂（2002年3月）に伴い、2005年以降産業分類の内容が変更されたが、ここでは改訂後の日本標準産業分類による数値を過去に遡及して算定している。

注3：調査産業計は「全産業活動指数（農林水産業生産指数を除く）」、建設業は「建設業活動指数」、製造業は「鉱工業生産指数」、その他の産業は「第3次産業活動指数」を用いた。

⑤指標のデータ

指標の作成結果は次のとおりである。

表1-2 労働生産性指数

(指数) (2005年 = 100)

	建設業	製造業	電気・ガス・熱供給・水道業	情報通信業	運輸業	卸売・小売業	金融・保険業	不動産業	飲食店・宿泊業	医療・福祉	教育、学習支援業	サービス業(他に分類されないもの)
1990	-	73.2	64.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1991	-	75.4	67.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1992	-	72.7	69.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1993	133.0	71.9	70.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1994	124.8	73.7	72.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1995	113.6	76.8	73.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1996	112.5	79.3	79.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1997	104.9	83.7	82.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1998	106.0	81.1	83.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1999	111.7	84.1	84.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2000	111.5	89.9	86.1	83.9	101.1	96.6	79.2	98.7	93.4	98.3	99.0	95.2
2001	113.1	87.2	89.7	91.9	100.7	95.3	85.1	99.5	93.7	99.8	94.9	95.0
2002	110.2	90.0	90.8	97.7	100.2	94.9	87.3	99.2	96.4	99.7	96.7	94.1
2003	105.3	94.2	94.6	97.8	98.9	96.2	91.2	98.9	98.9	100.2	99.4	94.7
2004	98.7	98.8	96.7	98.7	98.9	97.7	95.7	98.9	98.6	100.5	104.5	96.2
2005	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
2006	97.4	103.0	101.0	102.9	100.9	100.9	100.6	100.3	102.6	99.3	103.0	99.7

(対前年変化率)

(単位：%)

	建設業	製造業	電気・ガス・熱供給・水道業	情報通信業	運輸業	卸売・小売業	金融・保険業	不動産業	飲食店・宿泊業	医療・福祉	教育、学習支援業	サービス業(他に分類されないもの)
1991	-	3.0	4.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1992	-	-3.6	3.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1993	-	-1.1	1.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1994	-6.2	2.5	3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1995	-9.0	4.2	0.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1996	-1.0	3.3	7.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1997	-6.8	5.5	4.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1998	1.0	-3.1	1.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1999	5.4	3.7	0.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2000	-0.2	6.9	2.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2001	1.4	-3.0	4.2	9.5	-0.4	-1.3	7.4	0.8	0.3	1.5	-4.1	-0.2
2002	-2.6	3.2	1.2	6.3	-0.5	-0.4	2.6	-0.3	2.9	-0.1	1.9	-0.9
2003	-4.4	4.7	4.2	0.1	-1.3	1.4	4.5	-0.3	2.6	0.5	2.8	0.6
2004	-6.3	4.9	2.2	0.9	0.0	1.6	4.9	0.0	-0.3	0.3	5.1	1.6
2005	1.3	1.2	3.4	1.3	1.1	2.4	4.5	1.1	1.4	-0.5	-4.3	4.0
2006	-2.6	3.0	1.0	2.9	0.9	0.9	0.6	0.3	2.6	-0.7	3.0	-0.3

資料：「毎月勤労統計調査」、「全産業活動指数」、「建設業活動指数」、「鉱工業生産指数」、「第3次産業活動指数」  
注1：事業所規模5人以上

注2：日本標準産業分類の改訂（2002年3月）に伴い、2005年以降産業分類の内容が変更されたが、ここでは改訂後の日本標準産業分類による数値を過去に遡及して算定している。

注3：調査産業計は「全産業活動指数（農林水産業生産指数を除く）」、建設業は「建設業活動指数」、製造業は「鉱工業生産指数」、その他の産業は「第3次産業活動指数」を用いた。

### 1. 3 賃金コスト指数

#### ①指標の解説

ここでは、賃金コスト指数を作成する。賃金コストとは、生産物一単位に要する賃金のことである。労働投入量及び賃金が一定であると仮定すれば、労働生産性が高ければそれだけ賃金コストは低くなる。しかし、労働生産性の上昇が労働の質向上により達成されればそれに伴って賃金も上昇するため、実際には労働生産性の伸びと賃金の伸びの関係によって賃金コストは決まってくることになる。以下では、前項の労働生産性指数を用いて、2005年 = 100とする賃金コスト指数を作成する。

#### ②指標の作成結果

賃金コスト指数を2005年 = 100として算出すると、図1-3のようになる。上段が賃金コスト指数、下段はその対前年変化率である。

#### ③作成結果の説明

2000年以降ほとんどの産業で、賃金コストは低下傾向で推移している。これは、労働生産性が上昇する中で賃金の伸びが抑えられたためであると考えられる。

#### ④指標の作成方法

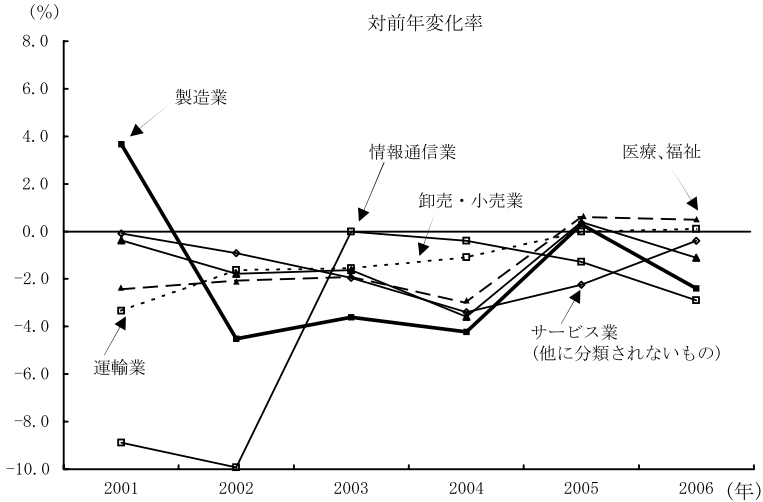
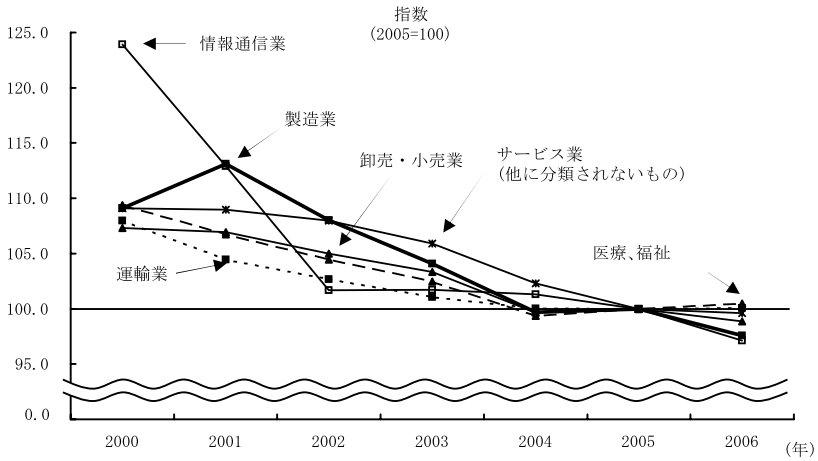
賃金コスト指数は、賃金指数を総実労働時間指数で除したものを、前項の労働生産性指数で除して算出した。賃金指数は厚生労働省「毎月勤労統計」（事業所規模5人以上）を利用した。

#### ⑤指標のデータ

賃金コスト指数の計算結果は表1-3のとおりである。



図1-3 賃金コスト指数



資料：「毎月勤労統計調査」、「全産業活動指数」、「建設業活動指数」、「鉱工業生産指数」、「第3次産業活動指数」

注1：事業所規模5人以上

注2：日本標準産業分類の改訂（2002年3月）に伴い、2005年以降産業分類の内容が変更されたが、ここでは改訂後の日本標準産業分類による数値を過去に遡及して算定している。

注3：調査産業計は「全産業活動指数（農林水産業生産指数を除く）」、建設業は「建設業活動指数」、製造業は「鉱工業生産指数」、その他の産業は「第3次産業活動指数」を用いた。

表1-3 賃金コスト指数

(指数)

(2005年 = 100)

	建設業	製造業	電気・ガス・熱供給・水道業	情報通信業	運輸業	卸売・小売業	金融・保険業	不動産業	飲食店・宿泊業	医療・福祉	教育、学習支援業	サービス業(他に分類されないもの)
1990	-	107.9	124.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1991	-	111.1	125.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1992	-	120.7	126.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1993	78.0	125.2	131.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1994	85.3	124.2	129.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1995	93.4	122.0	128.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1996	94.9	119.8	124.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1997	104.5	117.1	122.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1998	101.6	121.7	120.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1999	94.9	116.4	121.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2000	94.6	109.1	116.1	123.9	108.0	107.3	124.6	105.5	111.0	109.4	104.8	109.1
2001	92.0	113.1	112.6	112.9	104.4	106.9	115.6	103.5	111.3	106.7	109.5	109.0
2002	91.6	108.0	112.0	101.7	102.7	105.0	112.0	102.3	105.8	104.5	108.3	108.0
2003	94.7	104.1	106.7	101.7	101.1	103.3	107.5	102.5	99.6	102.5	103.1	105.9
2004	101.2	99.7	102.6	101.3	100.0	99.6	102.8	100.6	101.6	99.4	94.5	102.3
2005	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
2006	102.5	97.6	96.6	97.1	100.1	98.9	98.7	104.1	96.3	100.5	94.1	99.6

(対前年変化率)

(単位：%)

	建設業	製造業	電気・ガス・熱供給・水道業	情報通信業	運輸業	卸売・小売業	金融・保険業	不動産業	飲食店・宿泊業	医療・福祉	教育、学習支援業	サービス業(他に分類されないもの)
1991	-	3.0	0.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1992	-	8.6	1.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1993	-	3.7	4.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1994	9.4	-0.8	-1.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1995	9.5	-1.8	-0.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1996	1.6	-1.8	-3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1997	10.1	-2.3	-1.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1998	-2.8	3.9	-1.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1999	-6.6	-4.4	1.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2000	-0.3	-6.3	-4.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2001	-2.7	3.7	-3.0	-8.9	-3.3	-0.4	-7.2	-1.9	0.3	-2.5	4.5	-0.1
2002	-0.4	-4.5	-0.5	-9.9	-1.6	-1.8	-3.1	-1.2	-4.9	-2.1	-1.1	-0.9
2003	3.4	-3.6	-4.7	0.0	-1.6	-1.6	-4.0	0.2	-5.9	-1.9	-4.8	-1.9
2004	6.9	-4.2	-3.8	-0.4	-1.1	-3.6	-4.4	-1.9	2.0	-3.0	-8.3	-3.4
2005	-1.2	0.3	-2.5	-1.3	0.0	0.4	-2.7	-0.6	-1.6	0.6	5.8	-2.2
2006	2.5	-2.4	-3.4	-2.9	0.1	-1.1	-1.3	4.1	-3.7	0.5	-5.9	-0.4

資料：「毎月勤労統計調査」、「全産業活動指数」、「建設業活動指数」、「鉱工業生産指数」、「第3次産業活動指数」

注1：事業所規模5人以上

注2：日本標準産業分類の改訂（2002年3月）に伴い、2005年以降産業分類の内容が変更されたが、ここでは改訂後の日本標準産業分類による数値を過去に遡及して算定している。

注3：調査産業計は「全産業活動指数（農林水産業生産指数を除く）」、建設業は「建設業活動指数」、製造業は「鉱工業生産指数」、その他の産業は「第3次産業活動指数」を用いた。